

資料 4 シラーの詩〈An die Freude〉解釈の分岐点

* 幾つかの重要な分岐点

• Seid umschlungen !

- a) 一番多い訳例：抱きあえ＝ロマン・ロランの解釈だが、日本では誤訳とされている。
- b) NHKのテロップ＝わが抱擁を受けよ＝もしシラーが知ったらどういうでしょうか。
- c) 藤井訳＝抱かれてあれ（一番素直な訳だが、ある人は「変な日本語」という。しかし、「抱かれてあれ」の内容は深くて豊か。母の胸に抱かれ、大自然の懐に抱かれ、宇宙のみ胸に抱かれ（平原綾香〈ジュピター〉より）いのちの大本に繋がって生きることの安らかさ、力強さ。世間の毀誉褒貶など気にならない。他力の生き方。

• Diesen Kuss der ganzen Welt

- a) 多くの訳例：この口づけを全世界に！（具象としてもアレゴリーとしても意味不明だけでなく、私は、この言葉に、不気味な自己陶醉を感じる）
- b) 藤井訳：全世界からの、この口づけを受けてあれ
「この口づけ」とは、詩想的には、「樂園からの使者、うら若き娘の口づけ」、現実としての背景は、ケルナーたちの友情のこと、シラーはそれを「神の配慮」と受け止めていた。普遍的には、自分が受けている恵み（今ここに生かされて生きていることも含めて）を全宇宙からの恵みと受け取る、そういう姿勢が、その核心部。

• 第3詩節全般

- a) 一般的な解釈：ありとある生き物は、自然の乳房から喜びを飲む。すべての善人もすべての悪人もバラの道を辿って自然の懐に入ってゆく。すると自然は（あるいは喜びは）我々に、口付けと葡萄の木（葡萄酒）、そして、厳しい試練を耐え抜いた友を与えてくれた、うじ虫にも快楽は与えられ、天使には神の前に立つこと（喜び）を与える。（この解釈には、大学のゼミ程度の疑問個所が放置されている）
- b) 藤井の解釈：全ての存在（この世の被造物すべて）は、それぞれの自然本性（の乳房）を通じて喜びを享受している。どんな善人もどんな悪人も、それぞれバラの香跡を追って、自分好みの喜びを追跡する。すると、その求め方に応じて、口づけや葡萄酒（酒と女）、信頼できる友を得た。そういう快楽はうじ虫に与えられたもの。（「うじ虫」とは、「アダム的生き方のこと」。ルターは自分自身のことを「うじ虫の袋」と呼んでいた）そして、天使ケルプは神の前に立っている。真の喜びを求めようとしている。（天使ケルプは、エデンの園からアダムを追放した見張り役）（＝この解釈を踏まえ、私は、この詩節を「喜びの神学的考察」と考えている。第2区分と第3区分の間の微妙な長さのわけ）

• Durch des Himmels prächt'gen Plan のPlan （壮麗なる天意の法のそのままに〈 〉）

- a) 一般の解釈：平原（天上の壮麗なる平原を通して、〈恒星たちが飛翔するように〉）
- b) 藤井の解釈：計画、すなわち、神のこころ、創造主の心、大宇宙の摂理
星も草花も毛虫たちもすべて大宇宙の摂理のまま、嬉嬉として生きている、ということ。日本の一遍なら、「山川草木、なむあみだぶつならざるはなし」

• Ihr stürzt nieder, Millionen?

- a) よくある解釈：「跪いている」ことを咎める聞き方、「えっ、あなた、跪いているの？」
跪く対象を、封建君主、絶対的権威の相手、従ってそれへの反発が根底に
- b) 藤井の解釈：「跪いていない」のを咎める。「あなた、跪いていないの？ どうして？」
跪く対象を、「喜び＝樂園からきた娘＝神の愛＝創造主」と考える。
第4区分「荘厳な神殿の儀式」の姿勢の一つと受け取る